

## 夢風便り

ゆめかぜだより

Volume

2



特集 浜松まちなか  
おんな繁盛記

遠州偉人列伝

水でつないだ台湾との絆 鳥居信平

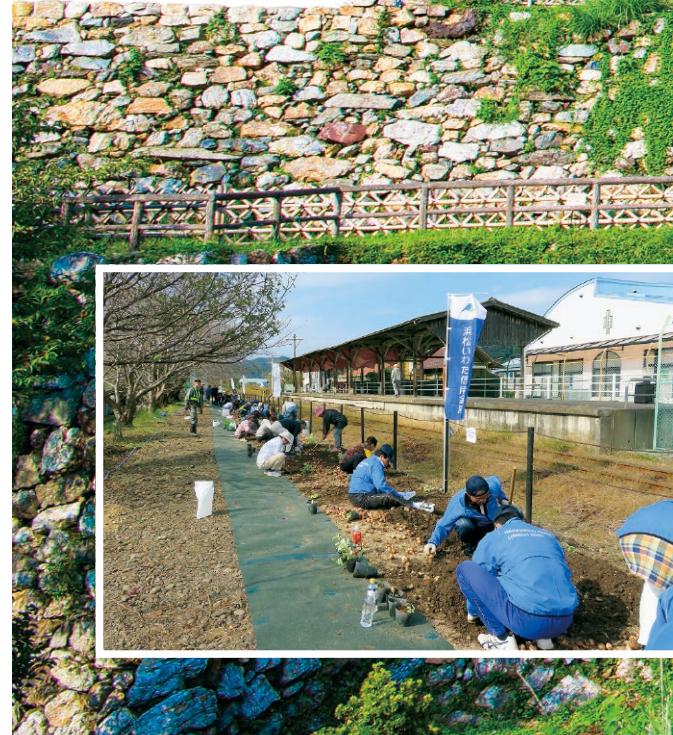
ワンデイ・トリップへの誘い 東栄町



メッセージ

過去、現在、そして未来へ。

「地域の夢に追い風を」をコンセプトとして、令和元年6月に創刊した「夢風便り」。私たち浜松いわた信用金庫は、この冊子を通じて地域の皆様に大切なメッセージをお伝えしたいと考えています。その一つは、今は歴史に埋もれてい る地域の先人たちの業績を掘り起こし、それを多くの人に知っていただくこと。そしてもう一つは、今を生きる地域の人々の「夢と志」を発見し、その想いを共有していただくことです。これらのメッセージを通じて、読者の皆様が自分たちの住む地域に誇りと愛着を持ち、よりよい未来を目指して行かれることを心から願っています。また、私たちはSDGs（持続可能な開発目標）を経営理念の根幹に据え、SDGs啓発活動や、「天浜線 人と時代をつなぐ花のリレー プロジェクト」などの多彩な地域貢献活動に取り組んでいます。本誌「夢風便り」もその一環であります。今後とも皆様に“元気の出るメッセージ”をお届けしたいと存じますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。



## Contents



- 2 メッセージ
- 5 特集
- 浜松まちなか  
おんな繁盛記**
- 12 遠州偉人列伝  
水でつないだ台湾との絆  
鳥居信平
- 16 ワンディ・トリップへの誘い  
花祭のまちを旅する  
自然の恵みで美しくなる／東栄町
- 20 輝く未来人  
磐田市 後藤莓衣さん
- 22 KIDSワクワクチャレンジ!  
ラジオ局おしごと体験
- 25 I Love Morimachi! 森町大好き!  
フランセスク・プラナス・セルベリヨさん
- 26 われら夢風カンパニー  
File : 03 株式会社Happy Quality  
File : 04 沢根スプリング株式会社
- 30 いきいき悠々倶楽部  
浜松市 鈴木昌子さん
- 32 未来に残したい遠州遺産  
医王山薬王院油山寺

# まちなか 浜松

## おんな が 繁盛記



# 「笑いの巨匠」を支えた浜松の肝っ玉女将

## 若手芸人たちが慕った 勝闘亭の「ちいちゃん」

大河ドラマ「いだてん」で、「勝闘亭」という寄席が登場したことをご記憶でしょうか。これは、明治28年(1895年)から大正年間、昭和初期まで肴町に実在した浜松唯一の寄席。この高座に上がったのは、東京から浜松にやって来た駆け出しの落語家たちで、その中には古今亭志ん生や柳家金語楼ら、後に大御所となる芸人もいました。

そんな「笑いの巨匠」たちの若手時代、親身になって面倒を見たのが「勝闘亭」の女将、馬淵すぎさん。前ページの丸顔の女性(モノクロ写真)がその人です。若い頃から寄席を切り盛りし、当時、寄席が面していた通りの名にちなんで「新小路小町」と呼ばれるほど、の美人でした。おまけに姉御肌で気風がよく、「いいわ、あたしが一肌脱ぐ！」が口癖。若い芸人たちからは「勝

闘のちいちゃん」の愛称で慕われていました。

さて、ちいちゃんが若き日の志ん生と出会ったのは明治の終わり頃。当時19歳で、三遊亭朝太の前座名を名乗っていた志ん生は、稼ぎを求めて浜松へやって来ます(ドラマでは森山未來さんが朝太を演じていました)。そして「勝闘亭」の世話になるわけですが、その行動は破天荒そのものでした。

まず、浴衣1枚、着の身着のままでお金がないのに大酒を飲む。仕方ないのでは、ちいちゃんから前借金をもらって何とかしのぎました。またある時は、近在の農家から新築祝いのお座敷がかかりますが、着て行く着物がない。その時も、ちいちゃんは「あんまり困らせるんじゃないよ」とツツツ言いながら、隣家の旦那から紺がすりの着物を借りてきてくれたといいます。

さらに、こんな“事件”もありました。勝闘亭の高座で「ガマの油」という噺

を演じた時のこと。大道芸の一つであるガマの油売りを滑稽に描いた爆笑ネタですが、それを噂に聞いた本物の大正年間の大道芸人たちが勝闘亭に怒鳴り込んできました。「おめえか、変な噺で俺たちの商売を邪魔するのは！」。青ざめる志ん生のピンチを救ったのは、またしてもちいちゃん。「これで何とか勘弁して」と、大金を払って大道芸人にお引き取りを願いました。

このほか、志ん生の破天荒エピソードは枚挙にいとまがありません。ちいちゃんに頼んで、二俣や森町などの仕事を回してもらっていた志ん生でしたが、掛川でどんでもない失敗をやらかしました。宿屋に泊まつたはいいが酒と博打で一文なしになり、宿代が払えない。怒った宿の主人に警察に突き出され、哀れ志ん生は留置場に放り込まれてしまいました。警察で、凶悪な指名手配犯に間違われたのです。

留置場では15日間も拘留されました。そこは志ん生、転んでもただでは起きません。同房になった地回りの親分に気に入られ、差し入れの料理をごちそうしてもらいました。「おめえ、何やってんだ?」「へえ、あっしゃ噺家で」「そうけ、なら一席やってみな」。牢屋の中が臨時の寄席となり、志ん生の独演会が繰り広げられたのです。

## 勉強家の金語楼を見て、「これは将来ものになる」

一方、浜松でちいちゃんの世話になったもう一人の大物は柳家金語楼。もともとは落語家でしたが、後に喜劇俳優に転じ、昭和28年(1953年)に始まったNHKの人気番組「ジェスチャー」に出演して大人気となりました。



▲「勝闘亭」のイメージイラスト(画・犬塚友吉 元「浜松百撰」アートディレクター)

▲名人となった古今亭志ん生(右)を東京の自宅に訪ね、縁側で対話する「ちいちゃん」と馬淵すぎさん

近年のコメディアンといえば、萩本欽一さんのような存在でしょうか。

その金語楼は6歳の頃に天才少年落語家としてデビュー。初めて一座で浜松に巡業してきたのは明治41年(1908年)、わずか7歳の時でした。ちいちゃんは少年時代の金語楼を「敬ちゃん、敬ちゃん(金語楼の本名は山下敬太郎)」と呼んで可愛がり、出番の時は着物を着せてやるなど、かいがいしく世話を焼きました。

金語楼は成長してからも足しげく浜松を訪れ、「勝闘亭」の高座に上がりります。志ん生と違って、金語楼は真面目な勉強家。ある時、ちいちゃんは楽屋で何かを熱心に読んでいる金語楼の姿を見かけます。そつとのぞき込むと、彼が読んでいたのは「中央公論」というインテリ向けの総合雑誌でした。ちいちゃんは後に述懐しています。「敬ちゃんは年がら年中巡業で、ろくに学校へも行ってない。なのに、あんなむずかしい本を読むなんて…。こりやあ、

将来、ものになると思ったよ」。

志ん生や金語楼をはじめ、数多くの若手芸人が集った浜松の「勝闘亭」。東京では陽の目を見ない落語家も「勝闘へ行けば三度三度の食事が出て、酒も飲める。困った時の勝闘だ！」とばかりに、喜び勇んで出掛けました。しかも浜松の客は目が肥えていて「あの落語家は手ぬぐいの持ち方がいけない」とダメを出

すなど、通ぶりを発揮していました。

そんな「勝闘亭」も、昭和に入ると映画など他の娯楽に押されて、客足が途絶えます。や



▲喜劇俳優、テレビタレントとして大成功した柳家金語楼(左)との2ショット

# 音に聞こえし浜松芸者の心意気

第一回 浜松おどり公演会 於浜松市民会館 昭和62年11月10~11

昭和30年代

## 年中、昼夜のお座敷で 目の回るほどの忙しさ

「勝闘亭」の全盛期から時は移り、昭和30年代(1955~1964年)に入った浜松のまちなか。織維産業と林業が最盛期を迎えていたこの当時、事業で成功した「おだいさま(遠州弁でお金持ちのこと)」が千歳町や肴町の目抜き通りを闊歩していました。そんな彼らが向かう先は、なじみの料亭。お目当てはおいしい酒と料理、そして見目麗しい芸者衆の艶姿です。

「あの頃は浜松全体で500人ほどの芸者がいましたねえ。織屋さんが『ガチャマン(織機を1回ガチャンと動かせば1万円儲かる)』で景気がよかつたですから。それに、天竜の山持ちさんが泊りがけで浜松のまちなかに遊びに来ることもよっちゅうありました。お陰で私たち芸者は、1年365日、昼夜両方でお座敷がかかり、目が回るほどの忙しさでした。」そう証言するの

さん(本名・河方博子さん)です。

さて、ここで「芸者遊びなんていふことがない」という大方の皆さんのために、芸者とはどのようなことをする人なのか、簡単にご説明しましょう。芸者の別名は芸妓。お座敷での酒宴に出て、舞踊、長唄、鳴り物(太鼓、鼓、笛)などを披露します。

「あっ、京都の舞妓さんのこと?」とお思いかもしれません、舞妓は芸妓(京都では「げいこ」と読みます)の見習い。東京や浜松では芸者の見習いを半玉といいます。芸者、半玉は置屋(タ

レントでいう所属事務所)に籍を置き、そこから料亭のお座敷に派遣されるというシステムです。

「私が半玉になったのは昭和31年(1956年)で、まだ中学を卒業したばかり。そこから2年修業して、本当の芸者になりました。当時は浜松に置屋が100軒、検番(芸者衆の稽古やお座敷への派遣を統括する事務所)が3カ所もあってね。どの置屋も忙しく、『売れっ子芸者が3人いれば蔵が建つ』と



▲半玉時代の利枝姐さん(左端)とみち奴姐さん(左から2番目)

いわれてましたよ」

そう語るのは、かつて「みち奴」の芸名で活躍した金原道子さん。芸者を引退してもう30年になりますが、今でも背筋がピンと伸び、おしゃべりも実際に達者です。浜松の花柳界に通じた人で、その名を知らない人はいません。

「私と利枝さんはほぼ同期で、二人とも元城の中部中学を卒業しました。中学時代から将来は芸者になることが決まっていて、髪を結ぶように髪の毛を長く伸ばしていましたね。学校へは置屋から通い、「お稽古がありますから」と言って授業は毎日半ドン(午後休み)でした(笑)。今では考えられないでしようけど、それが当たり前だったんですよ」(みち奴姐さん)。

ちなみに、みち奴姐さんは東京の生



▲昭和62年(1987年)の「浜松おどり公演会」で勢揃いした浜松の芸者衆。この頃はまだ最盛期の名残がありました。

まれ。もともとは、ちゃきちゃきの江戸っ子です。いかにも芸者さんらしい粋な雰囲気を漂わせるのも、もっともなことだと思います。

## 東京の一流の師匠に学び、 踊りや三味線の芸を磨く

実は、浜松の芸者さんはよそから来た人が大半でした。「私は浜松出身だけど、北海道、青森県、秋田県から来人が多かったですね」と利枝姐さんは言います。とくに多かったのは北海道・函館出身の人たちですが、それに

は深いわけがありました。



▲みち奴姐さん(左)と利枝姐さんの二人舞

今でも観光地として人気の函館は、明治、大正、昭和初期を通じて、漁業、商業の中心地として発展。とりわけ函館山の東側に位置する宝来町は、芸者置屋やカフェー、映画館、劇場が建ち並び、東京以北では最大の繁華街とされていました。つまり、仙台や札幌をしのぐほど栄えていたわけです。

ところが、昭和9年(1934年)3月、函館のまちを大火が襲います。風速39メートルの強風にあおられて火は燃え広がり、焼損家屋1万棟以上、死者2000名を超大惨事となりました。この火事で宝来町の繁華街は焼け、生き延びた芸者衆も路頭に迷います。

「何とか働き口を」と、多くの芸者衆が向かった先は、当然ながら1番は東京。そして、2番目が浜松だったといいます。この頃の浜松は、東海道で東京、大阪、名古屋、京都に次ぐほど、芸者衆の多

いました。函館から来た芸者たちにとって、故郷に比較的近い浜松が魅力的だったのかもしれません。また、浜松に来た芸者はこの地を気に入り、まだ函館にいる仲間に「浜松はいいところだから、あんたもおいでよ」と呼び寄せたとされています。

しかし、浜松の花柳界には厳しさもありました。一流の芸者と呼ばれるためには、踊り、三味線、笛や鼓などの稽古が欠かせません。「私たちは芸で評価されて初めて一人前。お稽古をつけ下さるお師匠さんは、すべて東京の一流どころでした。とくに清元の師匠は無形文化財に指定されるほどの人で、稽古は厳しく、ほんとに怖かった(笑)。でも、そのお陰で浜松の芸者は一流と認められたんです」(みち奴姐さん)。

東海道でその名も高い浜松の芸者衆。けれども時代は変化し、芸を愛でる粋な旦那衆も少くなりました。「今、現役の浜松芸者は私を含めてわずか6人。若い後継者が出てこない限りいずれ消滅するでしょうが、お座敷に出られる限りは精一杯頑張りたいですね」と利枝姐さん。浜松の芸者文化の灯は、まだ消えることはありません。



▲艶やかな女役のみち奴姐さん(前列中央)と、男役の利枝姐さん(後列中央)

# 肴町が「浜松の原宿」だった頃

昭和50年代



▲浜松のファッション黄金時代をリードした「ブティック エヴァ」の外観

## 乾物屋の倉庫を改装した最先端のブティック

昭和49年(1974年)10月、鮮魚店や乾物屋が並ぶ肴町の一角に、ひときわ異彩を放つきらびやかなお店がオープンしました。その店の名は「ブティック エヴァ」。乾物屋の倉庫を改装した高級洋装店でした。

「ファッションはアート」をコンセプトに、デザイン、生地、縫製などすべてにおいて上質を追求した「エヴァ」。その周辺には、個性的なデザインセンス

を誇るブティックが相次いで開店しました。そこへ流行に敏感な若者たちが続々と集まり、いつしか肴町は「浜松の原宿」と呼ばれる最先端のファッション基地となっていました。

「肴町は戦前まで魚河岸があったところ。活気はありましたが、ファッションとは縁遠かったですね。開店当時は道路もひび割れたアスファルトで、今のようなレンガ舗装ではありませんでした」。こう振り返るのは、「エヴァ」オーナーでバイヤーも務めた鈴木奈緒美さん。現在は衣料品販売を手掛ける



▲肴町で開かれたストリートファッションショーの一コマ。「ジャケットに半ズボン」のスタイル(右写真)が時代を感じさせる

有限会社マルスの代表取締役です。奈緒美さんは、妹の立花賀子さん(元「エヴァ」店長、現マルス専務)と二人で「エヴァ」を設立。もともとファッションに興味があった二人は、肴町の乾物屋さんから「倉庫を借りてほしい」と頼まれ、それに応えて「エヴァ」を開店しました。

「お店を開くからには、東京から最先端のブランドを持って来たいと思いました。当時はコムサデモード、ワイス、コムデギャルソン、コシノジュンコなどのファッションブランドがまさに花開こうとしていた時代。私は上京して原宿や青山などのアパレルメーカーを回り、デザイナーの三宅一生さんや高田賢三さんらにお会いしました。そして、浜松にファッション革命を起こすための仕入れ戦略を考案し、最新の商品を導入したんです」

奈緒美さんが仕入れた東京の高級ブランドは、たちまち浜松の若い女性たちのハートを射止めます。ある女性はボーナス袋を握りしめて来店し、「私に似合う素敵な服を選んで下さい!」と店員に頼み込みました。またある女性は高級外車で店に乗り付け、分厚い札束をポンと出して「これで買える服



▲山本寛斎さんのパリファッションショーを浜松市体育館で再現した

を見つこうってちょうどいい」と注文。ファストファッションが主流の現代では、ちょっと想像できない光景です。

昭和50年代の浜松はまさにファッション黄金時代で、肴町には「エヴァ」のほか、「ブルーグラス」「メンズビギ」「ニコル」などの高級ブティックが林立。また「ベルモード」や「ヤコボ」など他のまちの高級店も盛況でした。昭和56年(1981年)頃には、肴町のブティックが共同で「ストリートファッションショー」を開催。これにはブティックの店員やお客さんがモデルとして

参加。大勢の観客が見守る中、宵闇の

ストリートを颶爽と歩きました。

元店長の賀子さんは「あの頃はファッションに夢がありました」としみじみ語ります。しかし、昭和が終わってすぐの頃にバブルが崩壊。夢は急速にしほみました。肴町のブティックは1軒、また1軒と撤退し、奈緒美さんたちも「エヴァ」を閉じて、遠鉄百貨店に別の店を設けました。当時からのブティックは、今やわずかに残るのみです。

「あんな時代はもう二度と来ないかもしれません。でも、この世に女性がいる限りファッションは不滅です。私たちもこれからの世代に向けて、新しい夢を発信していきたいですね」と、賀子さんは未来を見据えています。



▲寛斎さん(中央)と対談する笹田陽子校長(右端)

装学院に入学。そこで山本寛斎さん、松田光弘さん、山本耀司さんら、後に世界を舞台に活躍するデザイナーの卵たちと出会ったのです。

文化服装学院を卒業し、陽子さんは浜松に戻りますが、やがて東京時代の仲間たちは次々と成功の階段を駆け上がっていました。これをチャンスと見て、陽子さんは行動を開始します。

昭和51年(1976年)、松田光弘さんを浜松に招いて「ニコル」ファッションショーを開催。そして昭和57年(1982年)、浜松市体育館で山本寛斎さんのファッションショーを開き、大きな反響を呼んだのです。

陽子さんの活躍で浜松のファッションをリードした同校も、現在はアニメーター教育などを加えた総合的な専門学校・高等学校に衣替え。時代は変われば、今後、新たな分野で浜松の文化発信基地となっていくでしょう。